

Figures | Yukhito Kono

会期：6月13日（土） - 8月2日（日）

会場：IACK

この度IACKは、写真家の河野幸人による個展「Figures」を開催いたします。

河野はこれまでに作品集やインスタレーションなど、様々な形態での作品発表から、テキストの執筆、オルタナティブスペース「IACK」の運営まで、写真家を名乗りながらも枠にとらわれない独自の活動を行ってきました。およそ2年ぶりとなる今回の個展では、本来ゴールデンウィークに合わせて開催を予定していた展示から急遽内容を変更し、人が集まるとはどのようなことだったのか、そして分断が進む現代社会における「共存」の可能性について思索する新作が展示されます。

依然として外出も憚れるご時世ではございますが、どうぞご高覧くださいませ。

—

「可視化される境界 — あるいはコロナ禍における写真表現について」

今回展示する作品は、本来ゴールデンウィークに合わせて発表を予定していた新作ではなく、急遽内容を変更し、制作したシリーズである。ぼくはこれまでどちらかといえば作品集や文章など、鑑賞に際して特定の場所に固定されることのない表現手段を好んで用いてきたが、このような時代だからこそ現実の場で、それ自体が移動することのない代わりに人に能動性を求めるような作品も必要なのではないかと思い、展示の開催を決定した。

本来発表予定だったものを含め、ぼくはここ数年「観光」をテーマにした作品を制作している。なぜ観光か。とある撮影地のリサーチを進めていたところ、観光がその土地に多大な変化をもたらした要因であることが分かり、その背景や影響に興味を抱いたからである。近年、世界の旅行者数は右肩上がりが増加しており、その結果、目に見えることから見えないことまで大小様々な変化が起こっているということは、作品制作を行うまでもなく誰もが感じられることであろう。ここ金沢も観光によって経済的に大きな恩恵を受け、変化した地方都市のひとつである。小さな街なので、これまでも海外から大型客船が寄港すると途端に外国人観光客で溢れかえっていたが、北陸新幹線の開通によりその光景は日常的なものとなった。しかし、現在進行形で猛威を奮っている新型コロナウイルスの影響により、ぼくたちは観光はおろか、外出などの基本的移動さえも制限される時代を迎えた。豪華客船はクラスター感染の象徴となり、新幹線も依然として席数を制限した上で運行している。

外出制限に加え、感染拡大防止のために国が（というよりも東京都が中心となり）メディアを通して繰り返し訴えかけたのは、感染リスクの高くなる密閉、密集、密接の「3密」状態を避け、「ゼロ密」を心がけよ、ということであった。それに伴いリモートワークやオンライン会議、ライブ配信など、部屋から出る必要も直接対面の必要もないコミュニケーション方式が大きな注目を集めた。芸術分野でも、オンライン展覧会やオンライン・アートフェアをはじめとした、インターネット上での試みが積極的に行われている。これらの打開策は、今後の働き方や消費活動の新たなスタンダードになっていくような気運もあったが、自粛が解除されるや否や、人々は現実空間に根ざした以前の生活サイクルに少しずつ戻り始めている。だが、ぼくたちは突如意識するようになった「密」という状態や集まることの意味について、もう一度踏み込んで考えてみる必要があるのではないだろうか。

例えばラッシュ時の満員電車や公共交通機関、週末の大通りやイベント会場など、密状態は都市生活の象徴であり、コロナ以前から避けられるべき、不快な状態とされていた。しかし、今回特に厳しい規制の対象となったライブハウスやクラブなどの場合はどうだろうか。そのような場所で密集した状況そのものが不快とされることは少ない。そこでは前者同様に、見ず知らずの他人と肩と肩が触れ合うような距離で、決して過ごしやすいような状態でもないにもかかわらず、ぼくたちが現在想定するようなリスクについても特に意識することなく、同じ空間内に集まっていた。目的の有無の違いはあれど、そこには数値的な判断材料や「密」などの言葉でひとつで括ることのできない、人間の活動と心理の複雑さが出ている。

また、コロナ禍において個人的に興味深く感じたことにも触れておきたい。非常事態宣言発令下において、ぼくたちは移動はおろか他人との接触は極力避けるべきとされたが、そんな最中でもマスクも着用せずに日常的に会話を交わし、寝食を共にしていた存在がいた。それは家族である。ぼくの家族もぼく自身も仕事のために少なからず外出していたが、それぞれがリスクを抱えているにもかかわらず、互いに自宅でマスクをして過ごすことはなかった。この無意識の線引きはどこから生じているのだろうか。ここにもまた、あらゆる境界が可視化された現代における「共存」について考える上での、重要なヒントが隠れているような気がするのである。

今回使用している写真は、2014年にアムステルダムのウェアハウス・パーティー（巨大な倉庫で開催されるクラブイベント）で撮影された。特に作品撮りをする意図もなく、また普段使用している機材も手元になかったため、コンパクト・デジタルカメラの光学ズームを最大限まで使用し（7.1倍、35mm判換算で200mm相当）、頭上にカメラをかざしながらストロボを焚いてランダムに撮影を行った。展示会場に設置されたストロボはその状況を再現する側面もあるが、最大の意図は写真を鑑賞することを拒絶すること、そして暗闇の中であらゆる境界をボカすことにある。写真家は必ずしもファインダーを覗いて、カメラを介した撮影者と被写体という構図を成立させる必要もないし、移動することがなくても作品を提示することができるはずだ。集まるとはどのようなことか、場はどのような意味を持つのか、そして境界が可視化される時代にぼくたちはどのように移動を行い、他者と共存し得るのだろうか。暗闇の中でイメージに囲まれ、改めてそのことについて考えてみたいと思う。

河野幸人

河野幸人 | Yukihito Kono

写真家、IACK代表。1989年、石川県金沢市生まれ。2011年に渡英し、ロンドン芸術大学 London College of Communicationにて写真を学ぶ。2014年に発表した作品集『Raster』は、アメリカの写真専門ギャラリー「Photo-eye」の主宰する年間ベストブックリストの1冊に選出される。写真家としての活動の傍ら、各国のアートブックフェアへの参加や執筆活動を行うなど、作品集というメディアを軸に多岐に渡り活動。2017年にはアーティスト・ラン・スペース、IACKを金沢市にオープン。国内外作家の作品や作品集の展示、販売、ディストリビューションを行う。

www.yukihitokono.com

IACK

住所：石川県金沢市高岡町18-3

営業時間：12:00 – 19:00（完全予約制）

定休日：火曜日

お問い合わせ：info@iack.studio